

2020年8月7日

2021年3月期 第1四半期連結決算電話会議 内容説明スクリプト

I. 全体の概要説明

それでは、本日発表いたしました当社2021年3月期第1四半期連結決算の概要についてご説明します。決算短信の表紙サマリーをご覧ください。

1. 2021年3月期第1四半期連結決算 業績概要

1) 当年度第1四半期連結経営成績

当年度第1四半期の連結経営成績は、前年同期比で減収、減益となりました。

- ① 売上高 1,969億円 前年同期比101億円の減収
(売上総利益 187億円 前年同期比43億円の減益)
- ② 税引前利益 35億円 前年同期比144億円の減益
- ③ 親会社の所有者に帰属する四半期利益2億円 前年同期比141億円の減益
となりました。

2) 全般概況

ここからは、当年度第1四半期連結決算の全般概況をご説明いたします。決算短信の表紙サマリーまたは決算補足説明資料のP1上段をご覧ください。

[第1四半期連結決算 業績概況 前年同期比較]

① 当年度第1四半期の金属価格の状況

銅およびニッケル価格については、前年度第4四半期に新型コロナウイルスの感染症の拡大による経済活動への懸念で大幅に下落した局面から当期がスタートしましたが、期中に中国、欧米で経済活動が再開したことにより底を打ち回復に向かいました。一方、金価格は当該感染症の影響による世界経済の先行き不透明感により、上昇基調で推移しました。この結果、当期の銅およびニッケル価格は、回復基調ではあるものの平均価格では前年同期間を下回り、金価格は前年同期間を上回りました。

② 当年度第1四半期の連結税引前利益の状況

当期は前述の金属価格の環境下、前年同期比で相場要因が金価格上昇による+28億円やニッケルの適用価格が上昇基調の中で+17億円と好転したものの、銅価格は大幅に下落したことにより▲152億円となり、相場要因全体で▲111億円と悪化しました。加えて、コスト差▲30億円、為替差損益▲11億円、材料事業の減益▲9億円等の悪化要因があります。一方、数量差は+19億円となりましたものの、全体としては相場要因を中心に悪化したことで、当期の連結税引前利益は前年同期比144億円減益の35億円にとどまりました。

3) トピックス

ここからは、当年度第1四半期連結決算における各トピックスについて概況をご説明します。

① 海外銅鉱山

新型コロナウイルスの感染症拡大に伴う国家非常事態宣言を受けて3月中旬から保安操業を開始したセロ・ベルデを除く各鉱山の当期の生産量は、コロナウイルス感染症拡大の影響が軽微であり、前年同期比で好転しました。一方で当期の各鉱山の損益は銅価格下落の影響等を中心に前年同期比で大きな減益となりました。

モレンシー

当期の生産量は昨年度から引き続きリーチング操業が好調で、高水準のカソード生産量が継続していることから、前年同期比4千トン増加の109千トンとなりました。一方、当期の売上総利益は銅価格の下落に加えコスト差も悪化、前年同期比で減益となりました。

シエラゴルダ

安定操業の継続と銅品位向上等により鉱石処理量が増加したことで、当期の生産量は前年同期比7千トン増加の34千トンとなりました。一方、当期の持分法損益は銅価格下落の影響が大きく前年同期比20億円減益の▲34億円となりました。

セロ・ベルデ

新型コロナウイルスの感染症拡大に伴う国家非常事態宣言を受けて3月16日から保安操業を開始したことから、当期の生産量は前年同期比26千トン減少の92千トンとなりました。当期の持分法損益も、減産に加え銅価格の下落による影響で赤字に転落し、前年同期比50億円減益の▲9億円となりました。

② タガニート HPAL

新型コロナウイルスの感染症拡大に伴い予定休転期間が一部長期化したことから、当期の生産量は前年同期比2.1千トン減少の7.0千トンとなりました。なお、予定休転期間は長期化したものの、操業は5月の決算発表時点の見込みよりも早いタイミングで再開しています。

③ CBNC (コーラルベイ)

新型コロナウイルスの感染症拡大による影響は軽微であり、当期の生産量は前年同期比0.7千トン増加の5.3千トンとなりました。

④ 材料事業

通期売上高は、前年同期比36億円増販の545億円となりました。

一方、材料事業のセグメント損益は、電池材料における在庫評価影響の悪化などにより前年同期比9億円減益の▲2億円と赤字となりました。

2. 2021年3月期 連結業績予想

1) 通期連結業績予想の概況

本年5月の2020年3月期の決算発表においては通期の連結業績予想を未定としました。今般、主要な非鉄金属価格は足元の水準を考慮し、主要製品の生産量及び販売量は足元の実績を踏まえつつ、現時点で入手可能な情報をもとに合理的と考えられる範囲を想定して算定しました。

決算短信 表紙サマリー下段、決算短信 添付資料5ページならびに決算補足説明資料のP5-6をご覧ください。

通期連結業績は、

- ① 通期売上高 8,350億円 前年度比 ▲376億円の減収
- ② 税引前利益 480億円 前年度比 ▲310億円の減益
- ③ 親会社の所有者に帰属する当期利益は320億円 前年度比 ▲286億円の減益

と予想しています。

業績予想の前提となる金属価格および為替は、決算短信 添付資料5ページならびに決算補足説明資料のP1下段に記載のとおり、第2四半期以降の前提は、銅 \$6,000/t、金 \$1,800/toz、ニッケル \$6.0/lb、コバルト\$13.5/lb、為替は107円/\$ としました。

通期の連結税引前利益は、前年度比較で金属価格が金価格を除いて下落の見込みであることから、価格・条件差が▲155億円となった他、為替差も▲18億円、在庫評価も▲50億円と相場要因全体で▲223億円の大幅な悪化を見込みます。加えて、前年度利益計上した太平金属工業の固定資産売却益90億円がなくなる一過性の減益要因を見込んでいることで全体の減益を説明できることとなります。

その他の要因として、数量差悪化で▲31億円、材料事業において5GインフラやPC関連の需要は堅調であるものの、スマートフォン向けや車載向けの販売は厳しい状況にあることによる減益▲33億円、また一過性の要因としてケブラダ・ブランカIIプロジェクトが新型コロナウイルスの感染症の影響に伴う建設中断コストを計上することで▲80億円等の減益要因がある一方で、コスト差において+169億円の増益要因があり相殺されることとなります。

以上より、通期の連結税引前利益は前年度比310億円減益となる480億円と予想しています。

2) トピックス

ここからは、通期連結業績予想における各トピックスについて概況をご説明します。

① 海外銅鉱山

通期生産量は、当年度前半に保安操業を余儀なくされたセロ・ベルデ、当年度の操業計画を期中で見直したモレンシーにおいて前年度比減少を見込むものの、この2鉱山を除く各鉱山の当年度通期の生産量は概ね前年度並みないしは前年度比増加を見込みます。一方、シエラゴルダ等を除き当年度の各鉱山の損益は銅価格下落の影響等を中心に前年度比減益を見込んでいます。

モレンシー

通期の生産量の見込みは、リーチング操業の好調による高水準のカソード生産を継続するものの、新型コロナウイルスの感染症拡大の影響と経済の先行き不安を見込んで当年度の操業計画を見直し、操業度と投資活動の削減を行うことにより前年度比で31千トン減少の430千トンを見込みます。しかしながら、5月発表の生産量の仮試算値に対しては10千トンの増加となります。

一方、販売量の見込みは、前年度の通期生産量が当初計画を大幅に上回り、一部の販売が当年度にずれ込んだことにより、当年度通期の販売量は生産量を上回り、前年度比で26千トン増加の463千トンを見込みます。これは、5月発表の販売量の仮試算値に対して15千トンの増加となります。

通年の売上総利益は、販売量増加も銅価格の下落による影響が大きく、前年度比で若干の減益を見込みます。

シエラゴルダ

安定操業継続と高い銅品位等の要因により鉱石処理量が増加することで、当期の生産量は前年同期比36千トン増加の144千トンを見込み、5月発表の仮試算値と同水準となります。当期の持分法損益は増産・増販により前年度比39億円増益の▲80億円を見込みます。

セロ・ベルデ

前述の通り、保安操業を3月16日に開始した後、政府認可により5月21日に操業を再開しましたが、当年度の操業計画を見直したことにより通期の生産量は前年度比96千トン減少の359千トンを見込みます。これは、5月発表の生産量の仮試算値に対して21千トンの減少となります。当年度の持分法損益も、減産に加え銅価格の下落による影響で前年度比76億円減益の20億円を見込みます。

② タガニート HPAL

前述の通り、操業は5月の決算発表時点の見込みよりも早いタイミングで開始したものの、通期での挽回には至らず当年度の生産量は前年度比1.3千トン減少の31.0千トンを見込みます。これは、5月発表の生産量の仮試算値に対して1.1千トンの増加となります。

一方、販売量の見込みは、期ズレがあったことにより、当年度の通期販売量は生産量を上回り、前年度比で5.0千トン増加の33.9千トンを見込みます。これは、5月発表の販売量の仮試算値に対して3.5千トンの増加となります。

③ CBNC（コーラルベイ）

前年度と比較して当年度は通期で順調な操業を見込むことにより、当年度の生産量は前年度比2.4千トン増加の21.5千トンを見込みます。これは、5月発表の生産量の仮試算値と同数値となります。

④ 材料事業

材料セグメント全体の通期売上高は、前年度比56億円減販の2,230億円と見込みます。

材料事業のセグメント損益は、減販要因を中心に前年度比33億円減益の20億円と見込みます。

⑤ 当年度における新型コロナウイルスの感染症影響の状況

新型コロナウイルスの感染症拡大による当社グループ事業への影響については、生産操業面や需要販売面、ひいてはプロジェクト進捗への影響等、様々ではありますが、ここでは操業停止等の生産操業面に関する影響のうち主なものを取り上げます。具体的内容は以下の通りです。

事業種別	会社・拠点	影響の内容や程度など
資源：海外銅鉱山	セロ・ベルデ	保安操業（2020.3.16～5.20）による減産
製錬：海外拠点	タガニート HPAL	3-4月の予定休転期間が一部長期化

3. 配当

配当についてご説明申し上げます。

決算短信 サマリー表紙下段および本日公表しました「業績予想および配当予想に関するお知らせ」をご覧ください。

当期 2020 年度の配当につきましては、前年度比減益予想となる当期利益 320 億円に業績連動に基づく配当性向 35%以上を適用し、中間 10 円/株、期末 31 円/株の合計 41 円/株と前年度比で減配となる見通しです。

II. 売上総利益、セグメント利益の内訳他の詳細

それでは、2021 年 3 月期第 1 四半期決算「補足説明資料」をご覧ください。

1. 1 ページ目「決算・予想比較」について

1) 2020 年度第 1 四半期決算 vs 2019 年度第 1 四半期決算

上段の表が、当年度第 1 四半期累計決算の前年同期比較です。増減①-②を中心にご覧下さい。

メタル価格と為替につきましては、その表の下段に記載のとおりです。

銅は\$5,341/t で、前年同期比\$773/t 下落しました。その後、南米での新型コロナウイルス感染症の拡大による供給懸念などを背景に上昇し、足元は\$6,400 台半ばで推移しています。

ニッケルは\$5.53/lb で、前年同期比\$0.03 の下落となりました。7 月初旬には\$6 を回復し、足元は中国、欧米の経済指標の改善を背景に\$6 台半ばまで上昇しています（LME+SHFE 在庫は、3 月末 257 千トン→足元 270 千トン）。

金は\$1,710/toz で、前年同期比\$400 の大幅な上昇となりました。当年度第 1 四半期は、当該感染症の影響を受け上昇基調で推移し、その後も新型コロナウイルス感染症の拡大を受けた投機資金の流入などにより上昇が続いています。足元は 8 月 5 日に史上初の\$2,000/toz 台を付けるなど、金相場の最高値更新を受けた買いが続いており、歴史的な高値で推移しています。

コバルトは\$14.97/lbで、前年同期比0.25\$の下落となりました。前年同期は\$15前後で概ね安定した値動きとなっていました。当年度第1四半期はやや軟調な値動きとなり、平均価格は前年同期を下回りました。直近8月6日メタルブリテンのStandard-Lowで\$14.60/lbとなっています。

為替の平均レートは107円62銭と前年同期比2円29銭の円高となりました。当年度第1四半期は、中国、欧米、日本などで経済活動が再開した一方で、新型コロナウイルス感染症拡大の第2波への懸念がある中、わずかに円高ドル安傾向で推移しました。当年度第1四半期の平均為替レートは前年同期比で円高となりました。足元は106円前後で推移しています。

次に業績についてですが、当年度第1四半期の売上高は1,969億円で前年同期比101億円の減収、税引前利益は35億円となり、前年同期比144億円の減益となりました。

その増減分析は、表の脚注に記載の通り、相場要因による影響が▲111億円です。このうち、価格・条件差で▲111億円、うち、銅で▲152億円、金で+28億円、ニッケルで+17億円、コバルトで▲5億円等となっており、銅の価格下落のマイナス影響が大半となっています。為替差は▲4億円、在庫評価は前年同期比で+4億円となりました。

数量差では+19億円の好転です。年間販売金量6tに向け順調な操業を継続している菱刈鉱山で前年度比増販となったことが主な要因です。その他の為替差損益については、円高により▲11億円の悪化、コスト差については、新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により前年同期比減産となったセロ・ベルデやTHPALの他、モレンシーなどで単位当たりコストの悪化があったことから▲30億円の悪化となりました。

材料事業は、前年同期比▲9億円の減益となりました。電池材料、粉体材料等で前年同期比増販となったものの、電池材料の在庫評価悪化影響や車載関連の各製品における減販などが主な要因です。

2) 2020年度決算予想(8月) vs 2019年度決算

続いて、今回公表した2020年度の通期決算予想と2019年度決算値との差異につきましては、1ページ目下段の表をご覧ください。

業績予想の前提としたメタル価格および為替与件をその表の下段に記載しています。

2020年度第2四半期以降、銅は\$6,000/t、ニッケルは\$6.00/lb、金は\$1,800/Toz、コバルトは\$13.5/lb、為替については107円/\$を前提としています。この結果、①の欄、8月公表2020年度通期決算予想においては、銅は\$5,835/t、ニッケルは\$5.88/lb、金は\$1,778/Toz、コバルトは\$13.87/lb、為替については107.16円/\$を前提としています。

2019年度実績値と比較しますと、銅が\$5,860から▲\$25、ニッケルが\$6.35から▲\$0.47、コバルトが\$15.76から▲\$1.89、それぞれ引き下げる一方で、金は\$1,462から+\$316引き上げています。また、為替については、108.74円から1円58銭円高となる前提としています。

この前提のもと、2020年度の通期決算予想は増減①-②の通り、税引前利益は前年度比▲310億円の減益となる480億円と予想しています。その増減分析は、表の脚注に記載の通りです。

まず、相場要因による影響がマイナス▲223億円です。このうち、価格・条件差でマイナス▲155億円、うち、銅でマイナス▲111億円、金でプラス+60億円、ニッケルでマイナス▲72億円、コバルトでマイナス▲39億円などとなっています。為替差でマイナス▲18億円、在庫評価はマイナス▲50億円の悪化を見込んでいます。

数量差は、▲31億円の悪化を見込んでいます。前年度比減販を見込んでいるセロ・ベルデの影響およびシエラゴルダは前年度比増販を見込むものの損失計上が続いているため分析上、増販によりマイナスサイドに計上されることとなっていることが主な要因です。コスト差は、前年度比増産を見込んでいるシエラゴルダや東予工場、CBNCなどの単位当たりコストの好転により+169億円の好転を見込んでいます。

材料事業は前年度比▲33億円の減益を見込んでいます。5GインフラやPC関連の需要は堅調であるものの、スマートフォン向けや車載向けの販売は厳しい状況であることによります。

その他の要因として、前年度に利益計上した子会社であった太平金属工業の固定資産売却益90億円がなくなり前年同期に計上した利益がそのまま減益となっています。また、一過性の要因として、ケブラダ・ブランカIIプロジェクトにおいて、新型コロナウイルスの感染症の影響により建設中断した期間の発生コストを期間費用として計上することによる▲80億円の減益要因を見込んでいます。

2. 3 ページ セグメント別対前年同期実績比較（売上総利益増減）

それでは、3 ページをご覧ください。セグメント別の前年同期比較です。

まず、左上の表の【資源セグメント】の売上総利益は、97億円となり前年同期並みとなりました。

同じページの中段以下に売上総利益の増減説明を記載しております。菱刈鉱山は、前年同期比+53億円の好転となりました。販売量が1.9トンと前年同期比0.6トンの増販となったことから、数量差で+21億円の好転、また、金価格が上昇したことから価格差は+26億円の好転となりました。

一方、海外銅鉱山は、▲51億円の悪化となりました。大半がモレンシーです。銅価の下落による▲29億円の悪化に加え、コスト単価差が21億円悪化したことなどにより、前年同期比悪化となりました。

次に、【製錬セグメント】の売上総利益は、84億円となり前年同期比▲3億円の減益となりました。その内訳は下段の表の通り、銅系で+8億円好転、ニッケル系で▲6億円悪化しています。

銅系+8億円の好転の主な内訳ですが、コスト単価差で▲4億円の悪化、在庫評価で+17億円の好転、その他で▲4億円の悪化となりました。その他のうち為替による影響が▲1億円となっています。

ニッケル系▲6億円の悪化の主な内訳は、数量差はTHPALの前年同期比増販などにより+5億円の好転、条件差では+7億円の好転となりました。当第1四半期のTHPALの生産量は休転の長期化により前年同期比で減産となりましたが、販売量は期ズレの出荷により、前年同期比で増販となり数量差は好転しました。在庫評価は▲12億円の悪化、その他で▲5億円の悪化となりました。その他のうち、為替による影響は▲2億円となっています。

3. 4 ページ セグメント別対前年実績比較 (材料事業の製品群別売上高)

それでは、4ページに移りまして上段、材料事業の製品群別売上高について説明します。

材料事業全体の売上高は、545億円となり前年同期比で+36億円の好転となりました。

電池材料の売上高は、前年同期がNCA増産体制の立ち上げ過程にあったことから前年同期比8億円増収の280億円となりました。粉体材料および結晶材料は、前年同期が在庫調整等の影響を受けたのに対し、当期は主要市場である中国が新型コロナウイルスの感染症影響から一足早く回復しつつあること等の要因により、粉体材料は12億円増収の80億円、結晶その他の事業は、前年度比6億円増収となる133億円となりました。また、パッケージ材料は10億円増収の52億円となりました。

3ページ材料セグメントの売上総利益は、前年同期比11億円減益となる36億円、セグメント損益は前年同期比9億円減益となる2億円の赤字となりました。

4. 4 ページ セグメント別対前年実績比較 (持分法投資損益)

次に、4ページ下の表にあります持分法投資損益について説明します。

持分法投資損益全体としては、前年同期比で84億円減益の▲36億円となりました。

マイナスの要因として大きなものは銅系です。主に銅価格下落の影響により、前年同期比で87億円減益の▲44億円となりました。

銅系のうち、セロ・ベルデは、保安操業を実施した影響で前年同期比減産・減販となりさらに、銅価格下落により前年同期比50億円減益のマイナス9億円となりました。カンデラリアとオホスについては、カンデラリアが前年同期比増産・増販となりましたが、6億円減益の2億円となりました。シエラゴルダは、操業の改善・安定化に伴い増産・増販となりましたが、銅価格下落の影響等により20億円減益の▲34億円となりました。アシッツ他については、金隆および三井住友金属鉱山伸銅がそれぞれ減益となったことから、前年同期比▲11億円減益の▲3億円となりました。PTVIなどニッケル系については、前年同期比10億円増益の6億円となりました。エヌ・イーケムキャット他については、前年同期比7億円減益の2億円となりました。

5. 4 ページ 金融収益・費用、その他の収益・費用の主たる増減

持分法投資損益の下に、「金融収益・費用、その他の収益・費用の主たる増減」の主なものを記載しておりますが、当第 1 四半期では特殊な要因等はありませんでしたので、説明は割愛させていただきます。

6. 5 ページ セグメント別予想比較 2020 年度決算予想（8 月）vs 2019 年度決算

それでは 5 ページをご覧ください。

2020 年の業績予想を 2019 年度決算と比較したものです。

なお、業績予想の数値は 10 億円単位の丸め数字で記載しています。

まず、一番上の表の売上総利益について、年度①および増減①-②を中心にご覧ください。

【資源セグメントの売上総利益は 460 億円と前年度比 46 億円の増益となる予想です。

同じページの中段以下に売上総利益の増減説明を記載しております。

菱刈鉱山は、年間で 6 トンの生産・販売は変わりませんが、金価格上昇の影響により価格差で 60 億円好転し、58 億円の増益となる予想です。

海外銅鉱山、内訳としてはモレンシーとノースパークスで大半がモレンシーです。前年度比減産ですが操業計画の見直しによりコスト単価差では 14 億円好転、増販により数量差で 6 億円好転を見込みますが、銅価格の下落による価格差 31 億円の悪化などにより 14 億円の減益となる予想です

次に、【製錬セグメント】の売上総利益については、440 億円と前年度比 74 億円の減益となる予想です。

その内訳は、下段の表の通り、銅系で 29 億円、ニッケル系で 67 億円悪化すると見ております。銅系は、2019 年度に定期休転のあった東予工場の前年度比増産となることからコスト単価差で 38 億円の好転を見込む一方で、条件差で 13 億円の悪化、在庫評価で 42 億円の悪化などにより 29 億円の減益となる予想です。なお、その他▲15 億円のうち、為替差は▲3 億円です。

ニッケル系は、THPAL や電気ニッケルが前年度比増販となることから数量差で 30 億円の好転、CBNC が前年度比増産となることからコスト単価差で 37 億円の好転を見込む一方で、ニッケルおよびコバルト価格下落の影響による条件差 111 億円の悪化などにより▲67 億円の減益となる予想です。なお、その他▲15 億円のうち、為替差は▲7 億円です。

7. 6 ページ セグメント別予想比較（材料事業の製品群別売上高）

それでは、6 ページに移りまして上段、材料事業の製品群別売上高について説明します。

材料事業全体の売上高は、2,230 億円で前年度比 56 億円の減収と予想しています。

通期売上高について、結晶材料は、第 2 四半期を底としてスマホ販売の回復、5 G 端末比率向上による増販などを見込んでいることにより、結晶、その他の事業では前年度比 60 億円増収となる 610 億円と予想しています。粉体材料は、第 2 四半期に一旦調整が入るものの基地局需要の下支えによる増販などにより、37 億円増収の 330 億円と予想しています。一方、電池材料は、顧客在庫調整の影響を受け生産・販売ともに第 2 四半期までの減少予想に対し、第 3 四半期以降は自

動車市場の回復を前提としてフル生産、販売を想定するものの、通期では大幅な減販となり、売上高は前年同期比 139 億円減収となる 1,130 億円と予想しています。パッケージ材料は 14 億円減収の 160 億円と予想しています。

5 ページ材料セグメントの売上総利益は、前年同期比 21 億円減益となる 180 億円、セグメント損益は前年同期比▲33 億円減益となる 20 億円と予想しています。

8. 6 ページ セグメント別予想比較（持分法投資損益）

下段の持分法投資損益について説明します。ここでは、5 億円刻みの丸数として表示しています。

まず、持分法投資損益全体としては、前年度比で 102 億円減益となる▲40 億円と予想しています。

マイナスの要因として大きなものは銅系とエヌ・イーケムキャット他の部分です。

銅系は前年度比で 43 億円減益の▲25 億円となりました。

セロ・ベルデは保安操業を実施した影響で前年度比大幅な減産・減販となることや銅価格下落の影響などにより前年度比 76 億円減益の 20 億円となる予想です。シエラゴルダは増産によりコスト差の大幅な改善などにより前年度比 39 億円増益の▲80 億円となる予想です。

エヌ・イーケムキャット他の部分は、前年度比で 68 億円減益の▲50 億円となる見込みです。エヌ・イーケムキャットは自動車触媒需要の落ち込みにより減収減益となる見込みであるほか、この中には、前述の新型コロナウイルス影響によるプロジェクト建設中断コストとして 80 億円を見込むケブラダ・ブランカⅡプロジェクトの損益を含んでいます。

9. 6 ページ 金融収益・費用、その他の収益・費用の主たる増減

金融収益・費用、その他の収益・費用の主たる増減につきましては、上述の為替の影響額、前年度の太平金属工業の事業撤退に伴う固定資産売却益ですので、説明は割愛いたします。

10. 9 ページ 財務状況（キャッシュフロー）について

最後に P9 財務状況のうち、下段にありますキャッシュフローについて説明します。

当第 1 四半期期首の現金及び現金同等物は 1,555 億円でした。営業活動によるキャッシュフローが+411 億円、投資活動によるキャッシュフローが▲273 億円となり、当第 1 四半期のフリーキャッシュフローは+138 億円となりました。財務活動によるキャッシュフローは 122 億円のマイナスであったことから、当四半期末の現金及び現金同等物は換算差額を含めて期首と同額となる 1,555 億円となりました。

以上